

第3章

学習指導の実態

第1節 教員の指導観

◎学校種によらず共通する教員の指導観

学校種によらず、「客観的な基準を使って、生徒を公平に評価すること」「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」「どの生徒にも、できるだけ学力をつけさせること」と回答した教員の比率が高い。

図3-1-1 教員の指導観①【教員調査】

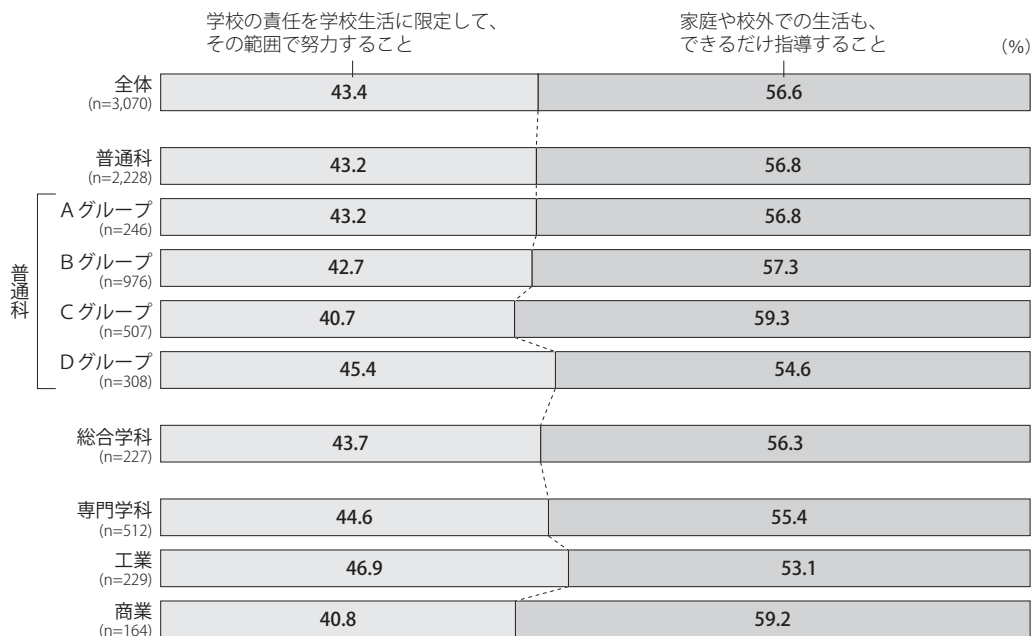


注)「無回答・不明」を除いて算出した。

教員に、授業などの指導の面でどのようなことを大切にしているかをたずねたところ、「客観的な基準を使って、生徒を公平に評価すること」(87.2%)、「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」(56.6%)、「どの生徒にも、

できるだけ学力をつけさせること」(90.3%)が、学校種によらず多数派を占めていた(図3-3-1~3)。学校種の差異を超えて、教員が共通してもっている指導観と考えられる。

図3-1-2 教員の指導観②【教員調査】



注) 「無回答・不明」を除いて算出した。

図3-1-3 教員の指導観③【教員調査】



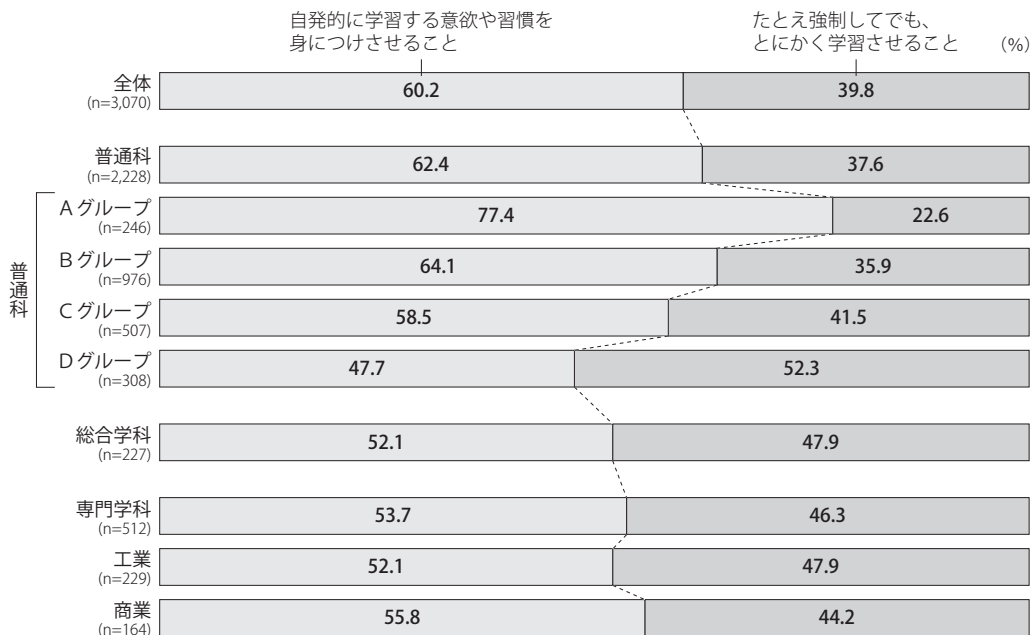
注) 「無回答・不明」を除いて算出した。

## Ⅱ 学習指導に関する学校の取り組みと教員の実態・意識

### ◎学校種によって異なる教員の指導観

同じ普通科であっても、生徒の中学校時代の成績（評定平均）が高い高校の教員ほど、生徒の自発性や潜在能力、幅広い学問知識を教授することを重視している。一方、生徒の中学校時代の評定平均が低い高校の教員ほど、基礎・基本をとにかく学習・訓練すること、しかし、生徒が楽しく学べる授業にすることを重視している。

図3-1-4 教員の指導観④【教員調査】

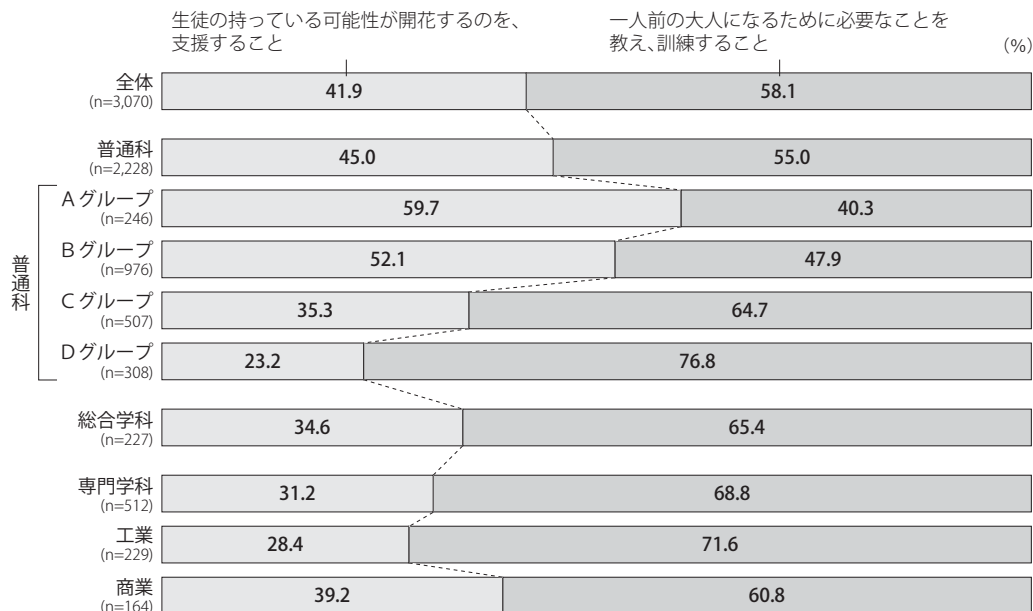


注) 「無回答・不明」を除いて算出した。

「自発的に学習する意欲や習慣を身につけさせること」を選択した教員の比率は、普通科 Aグループで 77.4%であったのに対して、普通科

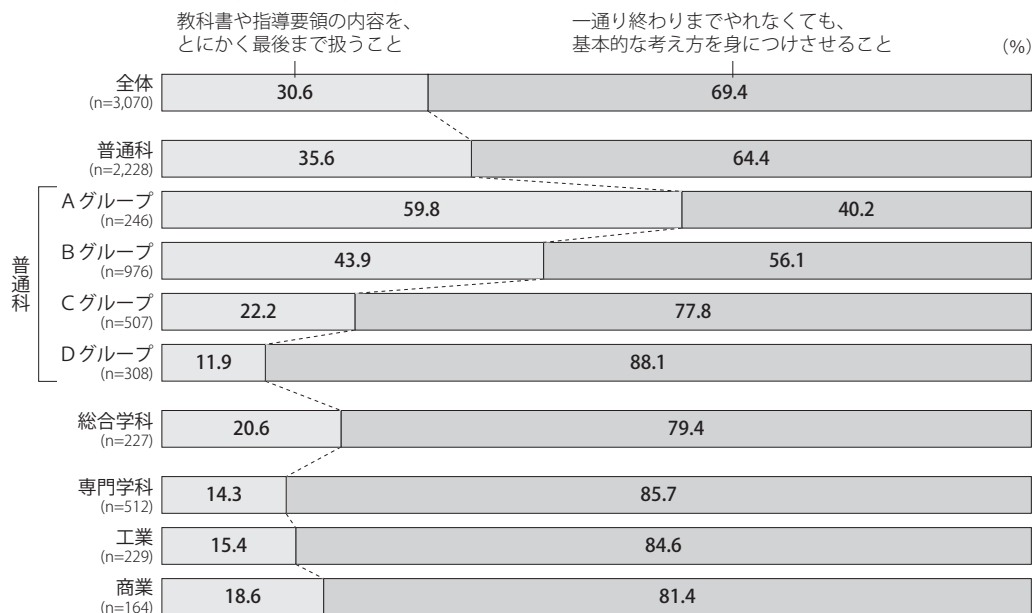
Dグループでは 47.7%であり、「たとえ強制してでも、とにかく学習させること」を選択した比率 (52.3%) を下回った (図3-1-4)。

図3-1-5 教員の指導観⑤【教員調査】



注)「無回答・不明」を除いて算出した。

図3-1-6 教員の指導観⑥【教員調査】



注)「無回答・不明」を除いて算出した。

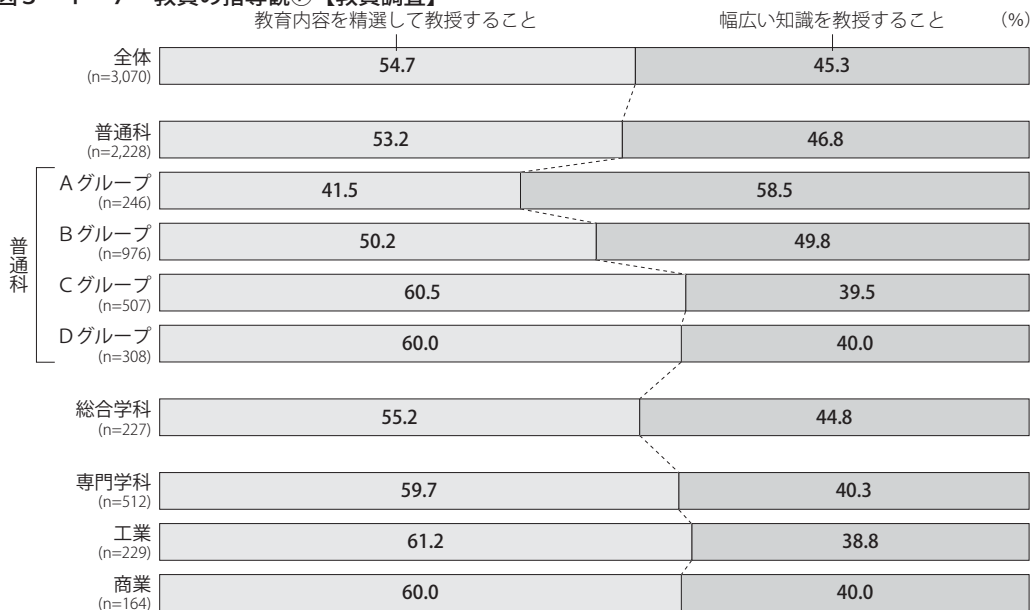
「生徒の持っている可能性が開花するのを、支援すること」を選択した教員の比率は、普通科 A グループで 59.7%であったが、普通科 D グループでは「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」を選択した比率が 76.8%と高い (図3-1-5)。

「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後

まで扱うこと」を選択した教員の比率は、普通科 A グループで 59.8%であったのに対して、普通科 D グループ、総合学科、専門学科では、「一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること」を選択した比率が全体平均よりも 10 ポイント以上高く、8~9 割弱であった (図3-1-6)。

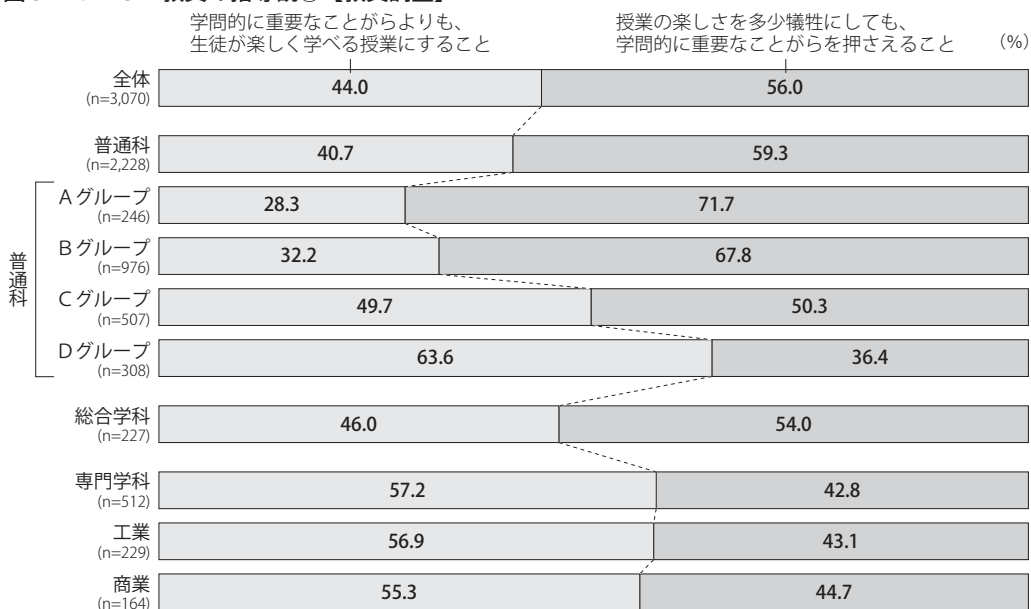
## II 学習指導に関する学校の取り組みと教員の実態・意識

図3-1-7 教員の指導観⑦【教員調査】



注) 「無回答・不明」を除いて算出した。

図3-1-8 教員の指導観⑧【教員調査】

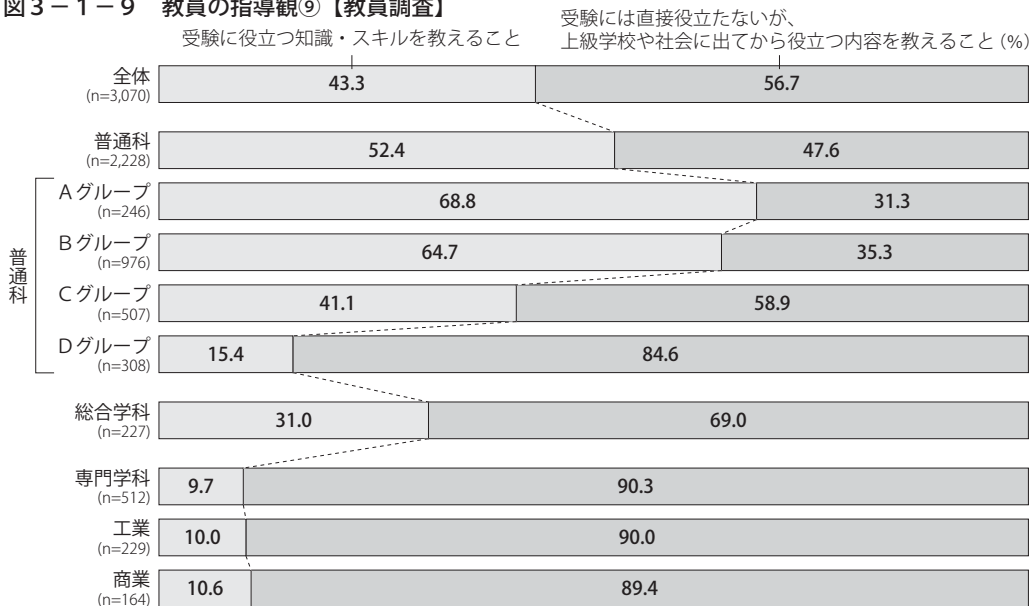


注) 「無回答・不明」を除いて算出した。

「教育内容を精選して教授すること」を選択した教員の比率は、普通科 A グループで 41.5% と、全体平均よりも 10 ポイント以上低くなっている。普通科 C・D グループでは「教育内容を精選して教授すること」を選択した比率が、全体平均よりも 5 ポイント以上高く、約 6 割であった(図3-1-7)。

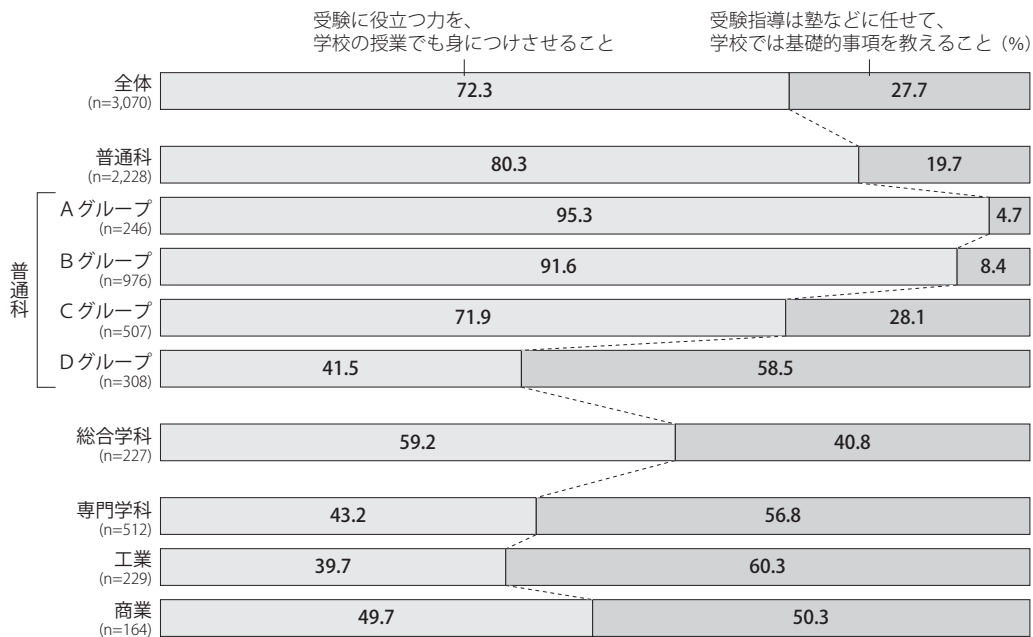
「授業の楽しさを多少犠牲にしても、学問的に重要なことがらを押さえること」を選択した教員の比率は、普通科 A グループで 71.7%、普通科 B グループで 67.8% と高い。一方、普通科 D グループ、専門学科では「学問的に重要なことがらよりも、生徒が楽しく学べる授業にすること」を選択した比率が約 6 割と高かった(図3-1-8)。

図3-1-9 教員の指導観⑨【教員調査】



注) 「無回答・不明」を除いて算出した。

図3-1-10 教員の指導観⑩【教員調査】



注) 「無回答・不明」を除いて算出した。

「受験に役立つ知識・スキルを教えること」を選択した教員の比率は、普通科 A グループで 68.8%であったのに対して、普通科 D グループでは 15.4%、専門学科では 9.7%であった。なお、総合学科では 31.0%と、普通科 C グループと D グループの間であった(図3-1-9)。

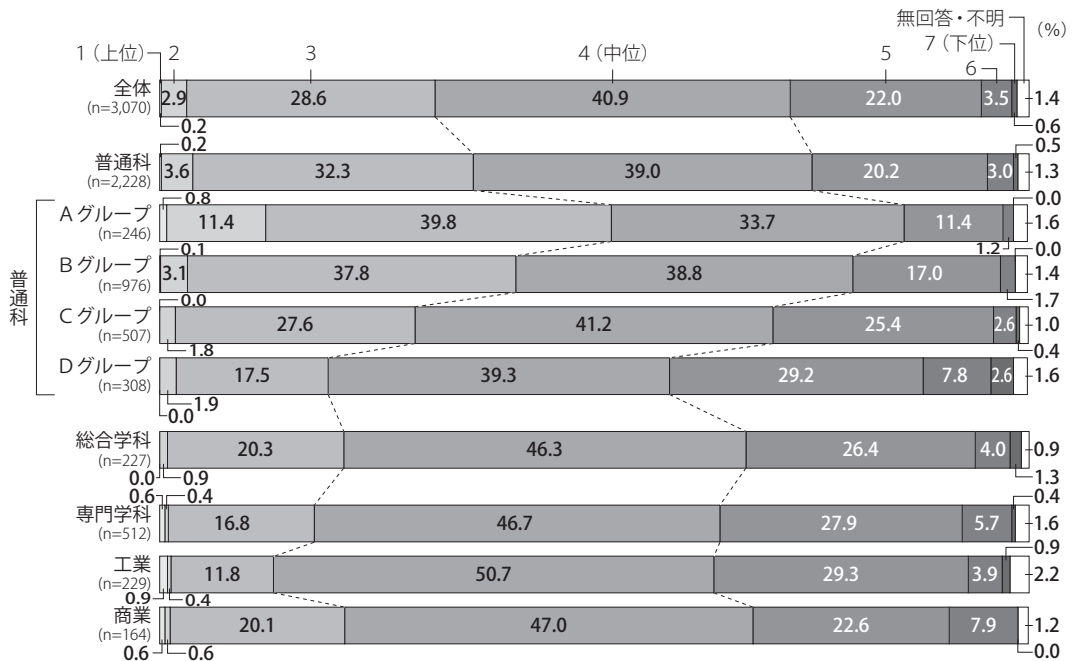
「受験に役立つ力を、学校の授業でも身につ

けさせること」を選択した教員の比率は、普通科 A グループで 95.3%、普通科 B グループで 91.6%と 9 割を超えている(図3-1-10)。一方、普通科 D グループ、専門学科では「受験指導は塾などに任せて、学校では基礎的事項を教えること」を選択した比率が約 6 割と高かった。

## 第2節 授業を進めるとき目安にする生徒の成績

普通科 A グループでは、中位よりも上の成績の生徒を目安に授業を進める教員が 52.0% と半数以上。それに対して、普通科 D グループ、総合学科、専門学科では、中位以下の成績の生徒を目安に授業を進める教員が 8 割前後であった。

図3-2-1 教員が目安にする生徒の成績【教員調査】



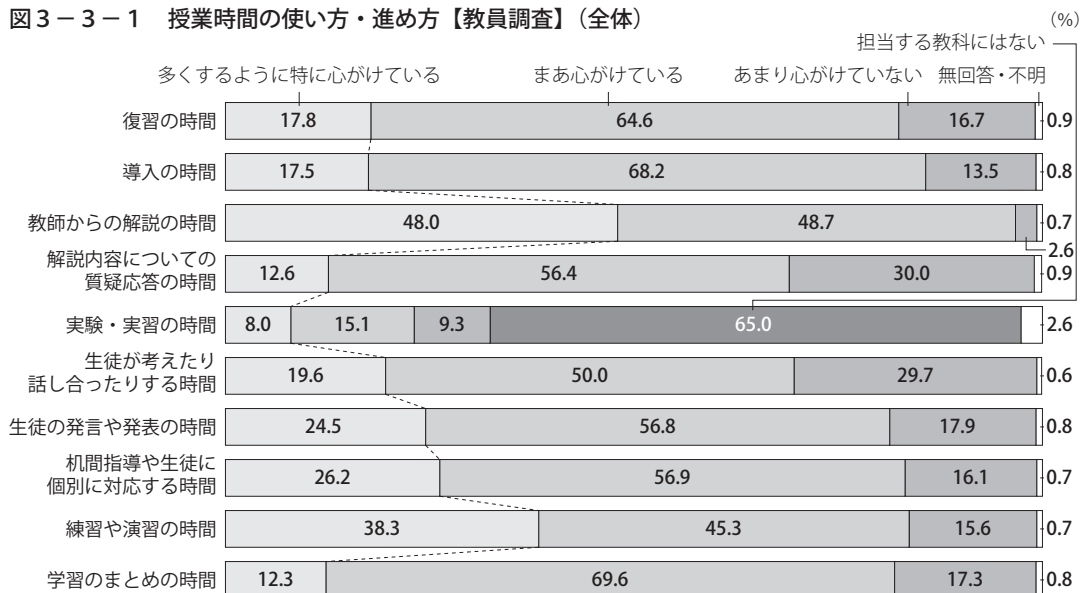
教員に、ふだんの授業でだいたいどれくらいの成績の生徒を目安に授業を進めているかをたずねた。全体平均では、「4 (中位)」と回答した比率が 40.9% ともっとも高く、つづいて「3」の比率が 28.6% と高かった。学校種別にみても、普通科 A グループでは、中位よりも上の成績の生徒を目安に授業を進める教員の比率

(「1 (上位)」 「2」 「3」の合計) が 52.0% となっており、半数を超えている (図3-2-1)。一方、普通科 D グループ、総合学科、専門学科では、中位以下の成績の生徒を目安に授業を進める教員の比率 (「4 (中位)」 「5」 「6」 「7 (下位)」の合計) が、それぞれ、78.9%、78.0%、80.7% と 8 割前後を占めている。

### 第3節 授業時間の使い方・進め方

教員が「多くするように特に心がけている」と回答した比率がもっとも高かったのは「教師からの解説の時間」(48.0%)。次に、「練習や演習の時間」(38.3%)が高かった。

図3-3-1 授業時間の使い方・進め方【教員調査】(全体)



注) 「実験・実習の時間」にのみ「担当する教科にはない」という選択肢がある。

表3-3-1 授業時間の使い方・進め方【教員調査】

	全体 (n=3,070)	普通科 (n=2,228)	Aグループ (n=246)	Bグループ (n=976)	Cグループ (n=507)	Dグループ (n=308)	総合学科 (n=227)	専門学科 (n=512)	工業 (n=229)	商業 (n=164)
復習の時間	17.8	16.7	13.4	13.4	17.6	26.0	19.4	20.9	19.7	17.1
導入の時間	17.5	16.7	15.4	15.1	18.1	20.5	14.5	20.5	20.1	18.9
教師からの解説の時間	48.0	49.1	52.0	50.1	50.1	40.9	46.7	44.9	42.4	50.0
解説内容についての質疑応答の時間	12.6	12.9	13.8	11.6	13.6	13.3	11.9	10.9	10.9	11.6
実験・実習の時間	8.0	7.3	6.5	7.4	7.5	7.1	10.1	9.8	6.6	9.8
生徒が考えたり話し合ったりする時間	19.6	20.4	24.8	19.7	19.3	16.9	17.2	16.8	17.9	15.9
生徒の発言や発表の時間	24.5	24.6	23.6	23.6	24.9	24.4	22.5	24.6	28.4	23.8
机間指導や生徒に個別に対応する時間	26.2	24.8	18.7	20.8	28.6	36.4	31.7	29.1	29.3	27.4
練習や演習の時間	38.3	38.6	31.3	37.4	42.0	41.2	38.3	37.1	40.2	32.3
学習のまとめの時間	12.3	11.7	9.8	10.5	15.2	11.7	14.1	12.5	13.5	13.4

注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) □は全体よりも5ポイント以上、▬は10ポイント以上低いものを示す。

授業を進める際にどのような時間の使い方や進め方を心がけているかをたずねたところ、「教師からの解説の時間」を「多くするように特に心がけている」と回答した比率が48.0%ともっとも高く、2番目は「練習や演習の時間」(38.3%)

であった(図3-3-1)。学校種別にも見てみると、普通科Dグループにおいて「机間指導や生徒に個別に対応する時間」を「多くするように特に心がけている」と回答した比率は全体よりも10ポイント以上高い(表3-3-1)。



## 第4節 授業の内容

「基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習」「基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習」「探究的な学習」のうち、「多くするように特に心がけている」と教員が回答した比率がもっとも高かったのは「習得」で71.8%。「活用」は46.7%、「探究」は10.8%であった。普通科A・Bグループでは「大学入試に役立つ点の解説や演習」、専門学科では「職業についてから役立つ学習」を「多くするように特に心がけている」と回答した教員の比率が高い。

図3-4-1 授業の内容①【教員調査】(全体)

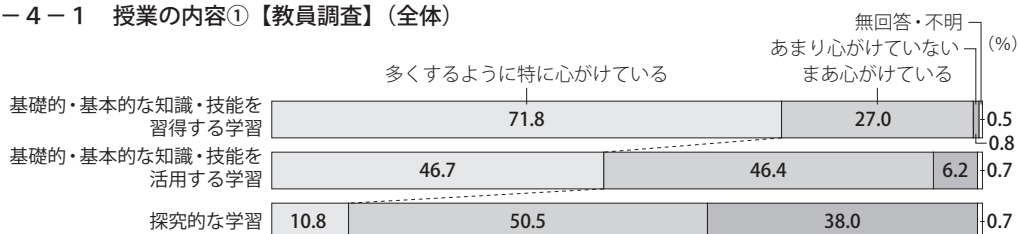
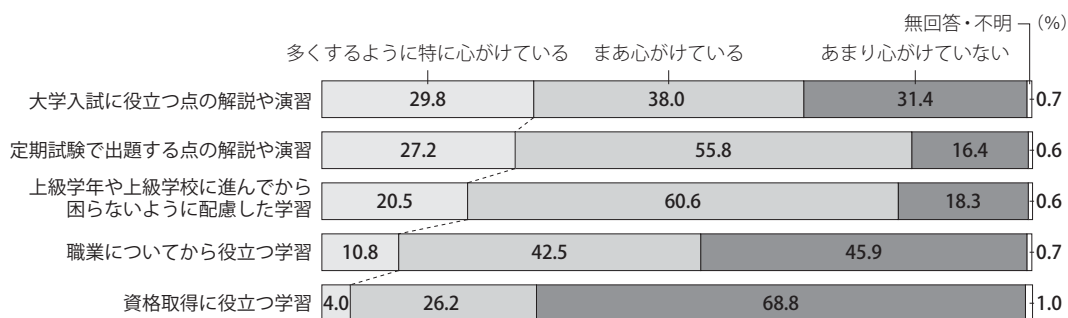


図3-4-2 授業の内容②【教員調査】(全体)



教員に、教科や領域の授業においてどこを心がけているかをたずねた。「基礎的・基本的な知識・技術を習得する学習」「基礎的・基本的な知識・技術を活用する学習」「探究的な学習」の3つに関して、「多くするように特

に心がけている」と回答した比率がもっとも高かったのは「習得」で、71.8%であった。次に高かったのは「活用」で46.7%、もっとも低かったのは「探究」で10.8%であった(図3-4-1・2)。

表3-4-1 授業の内容①【教員調査】

	全体 (n=3,070)	普通科 (n=2,228)	Aグループ (n=246)	Bグループ (n=976)	Cグループ (n=507)	Dグループ (n=308)	総合学科 (n=227)	専門学科 (n=512)	工業 (n=229)	商業 (n=164)
基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習	71.8	69.8	54.9	66.7	74.8	82.5	78.4	78.7	76.9	80.5
基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習	46.7	47.8	50.8	49.3	43.6	43.5	39.2	44.1	42.4	46.3
探究的な学習	10.8	11.6	17.1	12.4	9.3	5.8	7.9	6.6	4.8	8.5

注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) ◯は全体よりも5ポイント以上、◯は10ポイント以上低いものを示す。

表3-4-2 授業の内容②【教員調査】

	全体 (n=3,070)	普通科 (n=2,228)	Aグループ (n=246)	Bグループ (n=976)	Cグループ (n=507)	Dグループ (n=308)	総合学科 (n=227)	専門学科 (n=512)	工業 (n=229)	商業 (n=164)
大学入試に役立つ点の解説や演習	29.8	37.2	60.2	47.0	23.9	6.2	21.1	2.7	2.6	3.7
定期試験で出題する点の解説や演習	27.2	26.8	23.2	23.4	29.4	35.4	24.7	30.5	31.0	29.9
上級学年や上級学校に進んでから 困らないように配慮した学習	20.5	21.6	32.5	22.5	16.6	13.0	20.3	15.0	14.0	17.1
職業についてから役立つ学習	10.8	7.5	4.5	4.6	9.9	15.3	17.2	21.5	21.0	18.3
資格取得に役立つ学習	4.0	2.1	0.8	1.1	2.6	4.9	7.9	10.9	9.6	13.4

注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) ◯は全体よりも5ポイント以上、◯は10ポイント以上低いものを示す。

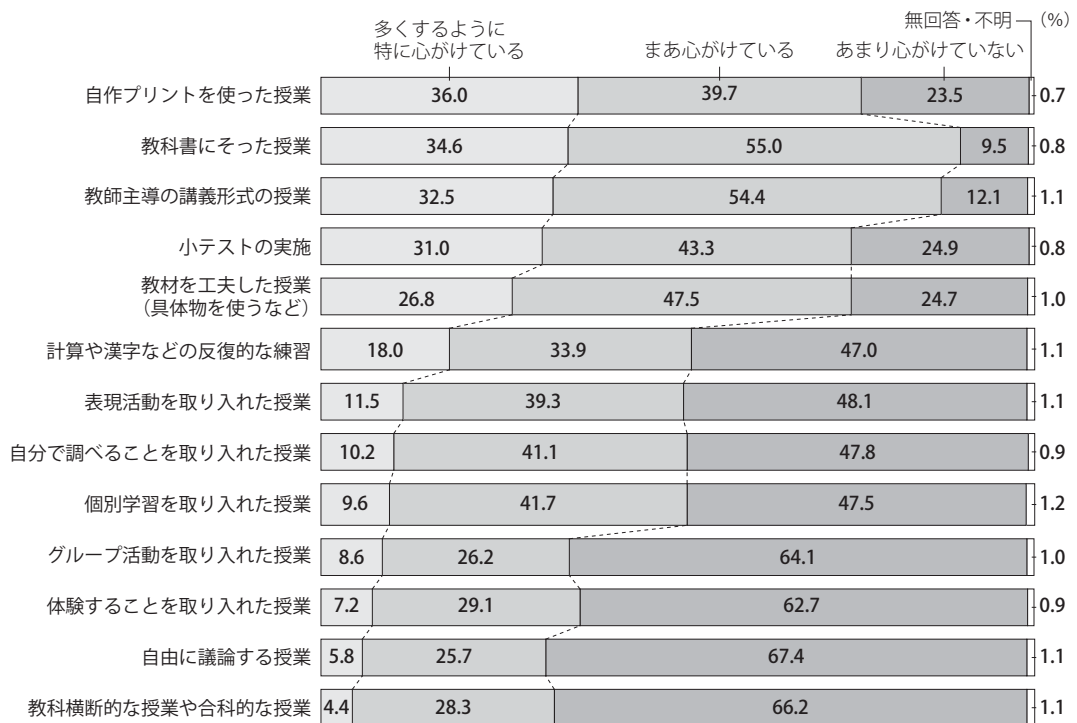
学校種別に見てみると、普通科Dグループで「習得」を「多くするように特に心がけている」と回答した比率が82.5%と全体と比べて10ポイント以上高い(表3-4-1)。一方、「探究」を「多くするように特に心がけている」と回答した比率は、普通科Aグループで17.1%となっており、全体と比べて5ポイント以上高

くなっている。「習得」「活用」「探究」以外の項目について学校種別に見てみると、普通科A・Bグループでは「大学入試に役立つ点の解説や演習」、専門学科では「職業についてから役立つ学習」を「多くするように特に心がけている」と回答した教員の比率が、全体と比べて10ポイント以上も高い(表3-4-2)。

## 第5節 授業の方法

教員が「多くするように特に心がけている」授業方法は「自作プリントを使った授業」で、36.0%であった。「心がけている」（「多くするように特に心がけている」「まあ心がけている」の合計、以下同）と回答した比率に着目すると、「教科書にそった授業」（89.6%）や「教師主導の講義形式の授業」（86.9%）が高い。用いている授業方法としては、「自作プリントを用いての学習」と回答した比率がもっとも高く、83.4%であった。

図3-5-1 授業の方法【教員調査】（全体）



教員がもっとも「多くするように特に心がけている」授業方法は「自作プリントを使った授業」で、36.0%であった（図3-5-1）。「心がけている」（「多くするように特に心がけている」「まあ心がけている」の合計、以下同）と回答した比率に着目すると、「教科書にそった授業」（89.6%）や「教師主導の講義形式の授業」

（86.9%）が高い。学校種別にみても、「計算や漢字などの反復的な練習」を「多くするように特に心がけている」と回答した比率は、普通科 A グループでは 7.3%、普通科 D グループでは 36.4%と大きな差がついている（表3-5-1）。

表3-5-1 授業の方法【教員調査】

	(%)									
	全体 (n=3,070)	普通科 (n=2,228)	Aグループ (n=246)	Bグループ (n=976)	Cグループ (n=507)	Dグループ (n=308)	総合学科 (n=227)	専門学科 (n=512)	工業 (n=229)	商業 (n=164)
自作プリントを使った授業	36.0	35.1	<u>30.9</u>	34.2	36.7	<u>42.5</u>	35.2	40.4	<u>42.8</u>	38.4
教科書にそった授業	34.6	35.1	37.4	33.4	37.7	35.4	36.1	33.4	31.0	<u>39.6</u>
教師主導の講義形式の授業	32.5	34.2	<u>39.8</u>	37.1	32.9	<u>26.9</u>	32.2	<u>26.4</u>	<u>23.1</u>	29.9
小テストの実施	31.0	32.5	28.0	33.0	32.9	34.1	29.5	<u>25.8</u>	26.6	<u>25.6</u>
教材を工夫した授業(具体物を使うなど)	26.8	25.8	26.0	25.5	26.8	26.6	25.6	30.7	29.7	29.3
計算や漢字などの反復的な練習	18.0	16.9	<u>7.3</u>	<u>13.0</u>	17.4	<u>36.4</u>	20.7	21.5	<u>27.9</u>	14.0
表現活動を取り入れた授業	11.5	11.2	12.6	9.8	11.4	11.7	12.8	10.9	13.1	7.3
自分で調べることを取り入れた授業	10.2	9.9	11.0	10.7	8.1	9.1	12.3	9.4	7.0	10.4
個別学習を取り入れた授業	9.6	9.7	9.3	8.9	9.3	11.4	9.3	8.2	7.9	7.9
グループ活動を取り入れた授業	8.6	8.8	11.8	7.9	8.7	7.8	8.4	6.8	5.2	8.5
体験することを取り入れた授業	7.2	6.3	5.7	6.0	6.3	5.2	11.0	9.0	7.9	9.1
自由に議論する授業	5.8	5.9	8.9	4.6	5.3	5.5	6.2	4.5	3.5	5.5
教科横断的な授業や合科的な授業	4.4	4.4	4.5	4.9	2.8	5.5	6.2	4.1	4.4	3.0

注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) □は全体よりも5ポイント以上、▬は10ポイント以上低いものを示す。

表3-5-2 授業で用いている方法【教員調査】

	(%)									
	全体 (n=3,070)	普通科 (n=2,228)	Aグループ (n=246)	Bグループ (n=976)	Cグループ (n=507)	Dグループ (n=308)	総合学科 (n=227)	専門学科 (n=512)	工業 (n=229)	商業 (n=164)
自作プリントを用いての学習	83.4	82.8	<u>78.0</u>	82.4	87.2	85.7	82.4	87.1	88.2	85.4
市販プリントを用いての学習	37.1	36.4	<u>26.8</u>	36.9	40.6	36.7	34.4	39.3	38.4	<u>42.1</u>
生徒に課題やテーマを与えて行う調べ学習	26.7	25.8	27.2	25.3	25.4	27.3	<u>34.8</u>	26.4	21.8	29.3
教師がコンピュータを使う授業	17.7	16.7	18.3	17.2	17.9	13.0	<u>23.8</u>	18.6	16.6	18.3
市販テストの利用	16.6	17.1	18.3	18.4	15.4	14.0	12.8	14.1	14.8	13.4
生徒がコンピュータを使う学習	8.1	7.2	5.7	6.3	9.7	7.5	<u>16.7</u>	7.6	5.2	6.7
生徒にテーマを選ばせて行う学習(テーマ学習)	7.5	6.8	6.5	6.6	7.7	6.2	10.6	9.2	5.2	11.6
電子黒板を使う授業	2.2	2.0	1.2	2.2	1.8	3.6	4.4	1.6	1.3	2.4

注1) 「はい」の%。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) □は全体よりも5ポイント以上、▬は10ポイント以上低いものを示す。

教科の授業において用いている方法をたずねたところ、「自作プリントを用いての学習」と回答した比率がもっとも高く、83.4%であった(表3-5-2)。「市販プリントを用いての学習」については37.1%、「生徒に課題やテーマ

を与えて行う調べ学習」は26.7%であった。学校種別にみても、普通科Aグループにおいて、「市販プリントを用いての学習」と回答した比率が全体と比べて10ポイント以上低かった。

## 第6節 定期試験、実力試験、外部模試の実施状況

学校種によらず、「定期試験」の回数は各学年4～5回程度。「実力試験」の回数も各学年1～2回程度で、大きな差はみられない。一方、「外部模試」の回数は学校種や学年による差が大きく、普通科A・Bグループの3年生では、6回前後実施している。実施月をみると、1・2年生では7月と1月の実施率が6～7割と高く、3年生では6～7月、9～11月の実施率が高く5割を超えている。

表3-6-1 定期試験、実力試験、外部模試の実施回数〔平均値〕【校長調査】

(回)

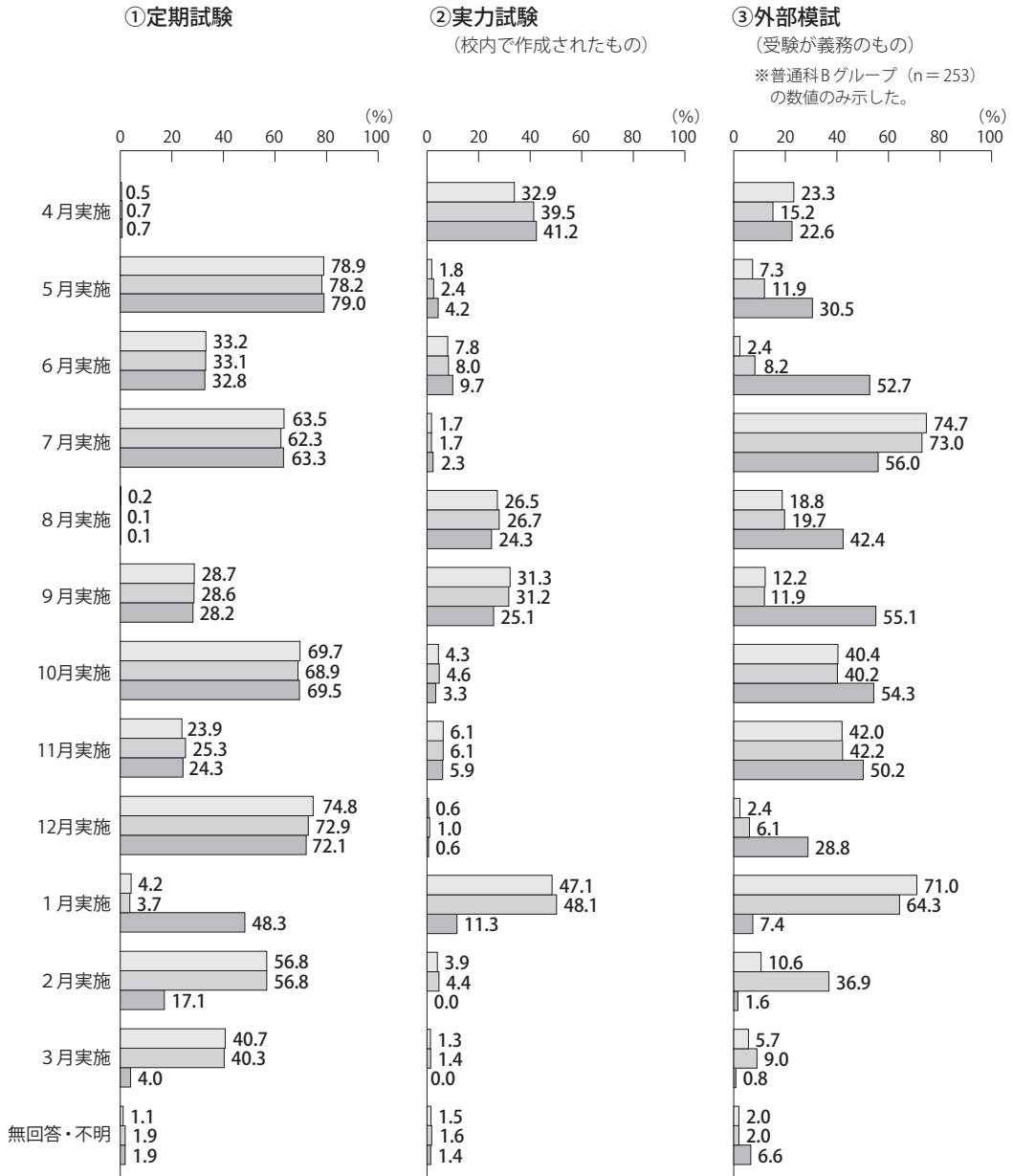
	全体 (n=830)	普通科 (n=578)	Aグループ (n=60)	Bグループ (n=253)	Cグループ (n=138)	Dグループ (n=83)	総合学科 (n=68)	専門学科 (n=160)	工業 (n=66)	商業 (n=58)	
①定期試験	1年生	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.9	4.7	4.8	4.9	4.8
	2年生	4.8	4.8	4.7	4.8	4.9	4.9	4.7	4.9	5.0	4.8
	3年生	4.5	4.4	3.7	4.3	4.7	4.8	4.5	4.8	4.9	4.8
	合計	14.1	14.0	13.1	13.9	14.4	14.6	13.9	14.5	14.8	14.4
②実力試験 (校内で作成されたもの)	1年生	1.7	1.8	1.9	1.9	1.6	1.6	1.3	1.6	1.1	1.8
	2年生	1.8	1.9	2.1	2.0	1.7	1.6	1.4	1.6	1.0	1.9
	3年生	1.3	1.4	1.9	1.3	1.2	1.4	1.0	1.2	0.8	1.6
	合計	4.8	5.1	5.9	5.2	4.5	4.6	3.7	4.4	2.9	5.3
③外部模試 (受験が義務のもの)	1年生	2.3	2.6	3.2	3.2	2.0	1.3	2.1	1.2	1.1	1.4
	2年生	2.7	3.0	3.7	3.6	2.4	1.4	2.2	1.4	1.4	1.4
	3年生	4.1	4.8	6.2	5.9	3.4	1.7	2.9	1.5	1.4	1.3
	合計	9.1	10.4	13.1	12.7	7.8	4.4	7.2	4.1	3.9	4.1

校長に、学校で実施している主な試験についてたずねた。まず、回数についてみると、「定期試験」は、学校種によらず各学年4～5回程度であった(表3-6-1)。「実力試験(校内で作成されたもの)」に関しても、多少のばら

つきはみられるものの、学校種によらず各学年とも1～2回程度となっている。一方、「外部模試(受験が義務のもの)」の回数については、学校種や学年による差が大きく、普通科A・Bグループの3年生では、6回前後実施している。

図3-6-1 定期試験、実力試験、外部模試の実施月【校長調査】

□ 1年生 □ 2年生 □ 3年生



次に、実施月をみてみると、「定期試験」については、「5月」「7月」「10月」「12月」の実施率が3学年とも高い(図3-6-1)。「実力試験」は、「4月」「8月」「9月」の実施率が3学年とも比較的高くなっているが、1・2年生では「1月」の実施率がもっとも高く50%近くになっている。「外部模試」に関しては、

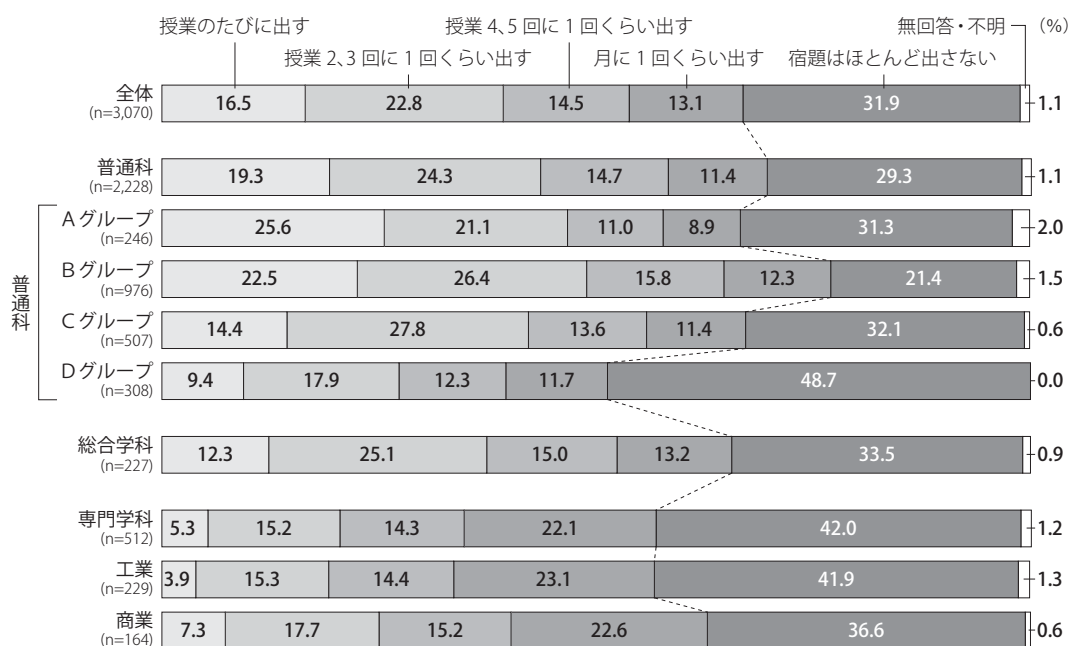
学校種による差があるため、ここでは普通科Bグループに限定して、学年ごとの実施月の様子を示した。これをみると、1・2年生では「7月」「1月」の実施率が6~7割と最も高いのに対して、3年生では「6月」「7月」「9月」「10月」「11月」の実施率が5割台と高くなっている。

## 第7節 宿題、家庭学習指導

### 7-1 宿題

教員に宿題の出題頻度をたずねたところ、「宿題はほとんど出さない」と回答した比率がもっとも高く、31.9%であった。学校種別にみても、普通科Dグループで「宿題はほとんど出さない」と回答した比率が48.7%と半数近くとなっている。宿題の主な内容は「学校指定の副教材、問題集」「教科書の内容」を「出す」（「よく出す」「たまに出す」の合計）と回答した比率がもっとも高く、7割5分を超えている。

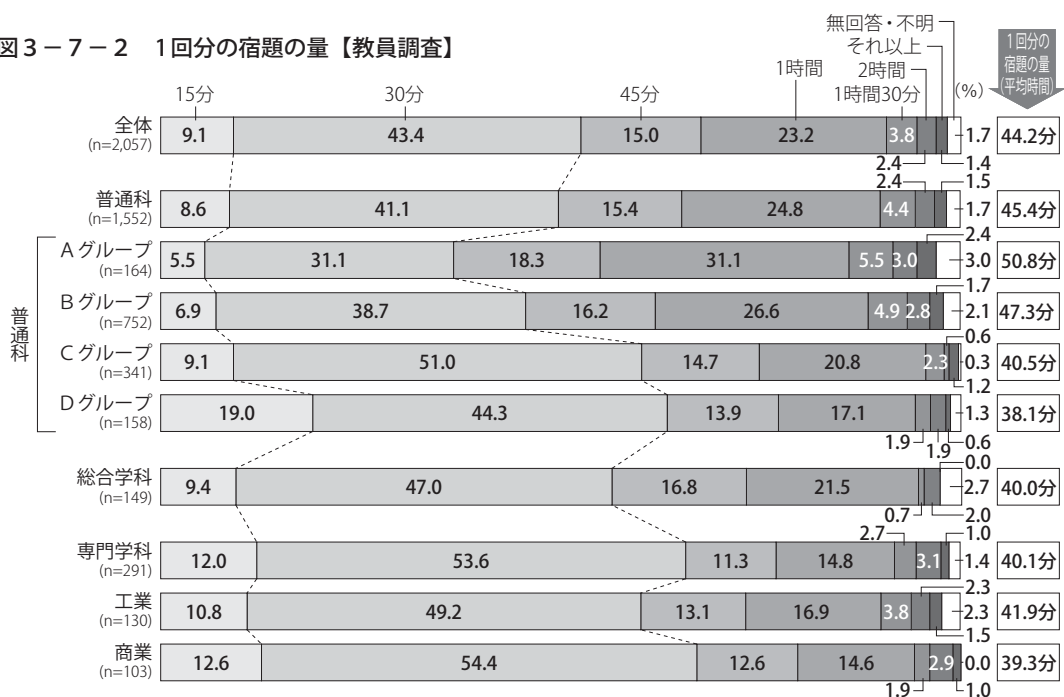
図3-7-1 宿題を出す頻度【教員調査】



教員に、宿題の出題頻度をたずねたところ、「宿題はほとんど出さない」と回答した比率がもっとも高く、31.9%であった（図3-7-1）。学校種別にみても、普通科Dグループで「宿題はほとんど出さない」と回答した比率が48.7%と高い。また、1回分の宿題の量をたずねたところ、「30分」と回答した比率が学校種

によらずもっとも高い（図3-7-2）。なお、普通科Aグループについては、「30分」と回答した比率が、「1時間」と同じで31.1%であった。1回分の宿題の量（平均時間）をみると、もっとも長いのは普通科Aグループで50.8分、もっとも短いのは普通科Dグループで38.1分であった。

図3-7-2 1回分の宿題の量【教員調査】



注1) 宿題を出す（「授業のために出す」「授業2、3回に1回くらい出す」「授業4、5回に1回くらい出す」「月に1回くらい出す」のいずれかを選択）と回答した教員（n=2,057）のみ分析。  
 注2) 「1回分の宿題の量（平均時間）」は、「15分」を15分、「2時間」を120分、「それ以上」を150分のように置き換えて、「無回答・不明」を除いて算出した。

表3-7-1 宿題として出す内容【教員調査】

	全体 (n=2,057)	普通科 (n=1,552)	Aグループ (n=164)	Bグループ (n=752)	Cグループ (n=341)	Dグループ (n=158)	総合学科 (n=149)	専門学科 (n=291)	工業 (n=130)	商業 (n=103)
学校指定の副教材、問題集	78.3	80.9	84.8	81.1	83.0	71.5	74.5	66.3	66.1	70.9
教科書の内容	76.7	77.9	71.4	77.7	82.1	82.9	73.2	72.1	70.8	72.8
定期試験対策になる内容	72.4	71.8	63.4	73.5	74.2	74.1	77.8	72.2	73.0	68.0
自作プリント	69.0	69.0	61.6	70.7	71.3	71.5	65.1	69.4	70.8	65.0
基礎的・基本的な知識・技能を習得する課題	67.7	67.9	61.5	69.1	69.8	68.3	72.5	63.3	63.1	63.1
授業でやり残した作業や課題	64.4	63.2	59.1	62.5	66.0	70.9	72.5	67.0	69.2	63.1
基礎的・基本的な知識・技能を活用する課題	53.8	55.8	53.6	60.4	51.9	47.5	52.3	41.6	37.7	47.6
大学入試対策になる内容	47.2	55.3	63.4	68.1	42.2	13.9	36.9	9.3	8.4	12.6
授業の予習	45.8	49.1	53.6	52.0	44.9	34.8	47.6	26.1	19.2	33.0
計算や漢字などの反復的な練習	43.1	41.1	28.7	35.4	54.9	57.6	45.7	51.2	52.3	51.5
作文やレポート	25.3	24.9	28.1	25.4	22.5	23.4	26.9	26.8	24.6	25.2
調べ学習	18.6	17.4	10.9	18.1	19.1	17.7	20.8	23.0	18.5	27.2
資格取得対策になる内容	11.8	9.3	3.0	8.7	12.6	11.4	16.8	22.0	20.0	24.3

注1) 宿題を出す（「授業のために出す」「授業2、3回に1回くらい出す」「授業4、5回に1回くらい出す」「月に1回くらい出す」のいずれかを選択）と回答した教員（n=2,057）のみ分析。

注2) 「よく出す」+「たまに出す」の％。

注3) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注4) 〃は全体よりも5ポイント以上、〃は10ポイント以上低いものを示す。

つづいて、宿題の内容について教員にたずねたところ、「学校指定の副教材、問題集」を「出す」（「よく出す」「たまに出す」の合計、以下同）と回答した比率がもっとも高く、78.3%であった（表3-7-1）。「教科書の内容」を「出す」と回答した比率も76.7%と7割5分を超えてい

る。学校種別に見てみると、普通科A・Bグループでは「大学入試対策になる内容」、普通科C・Dグループでは「計算や漢字などの反復的な練習」、専門学科では「資格取得対策になる内容」を「出す」と回答した比率が全体と比べて10ポイント以上高い。



## II 学習指導に関する学校の取り組みと教員の実態・意識

### 7-2 家庭学習指導

受け持ちの生徒に対して家庭での学習時間（宿題を除く）の指導をしている教員の比率は56.0%。普通科Bグループでもっとも高く、69.9%であった。

図3-7-3 受け持ちの生徒に対する家庭での学習時間の指導の有無【教員調査】

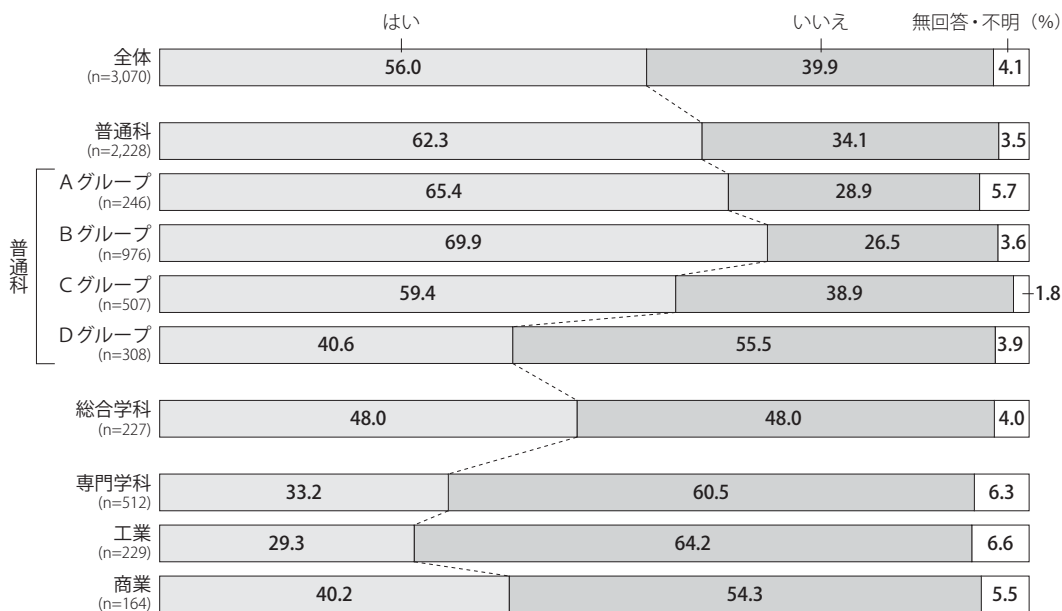


表3-7-2 ふだん指導している家庭での学習時間〔平均値〕【教員調査】

	全体 (n=1,719)	普通科 (n=1,389)	Aグループ (n=161)	Bグループ (n=682)	Cグループ (n=301)	Dグループ (n=125)	総合学科 (n=109)	専門学科 (n=170)	工業 (n=67)	商業 (n=66)
ふだん指導している家庭での学習時間〔平均値〕	100.1	105.0	122.8	111.2	93.5	67.1	90.7	65.3	59.8	70.5

注1) 受け持ちの生徒に対して家庭での学習時間（宿題を除く）を指導している（「はい」を選択）と回答した教員（n=1,719）のみ分析。

注2) 「ふだん指導している家庭での学習時間〔平均値〕」は、「15分」を15分、「3時間」を180分、「それ以上」を210分のように置き換えて、「無回答・不明」を除いて算出した。

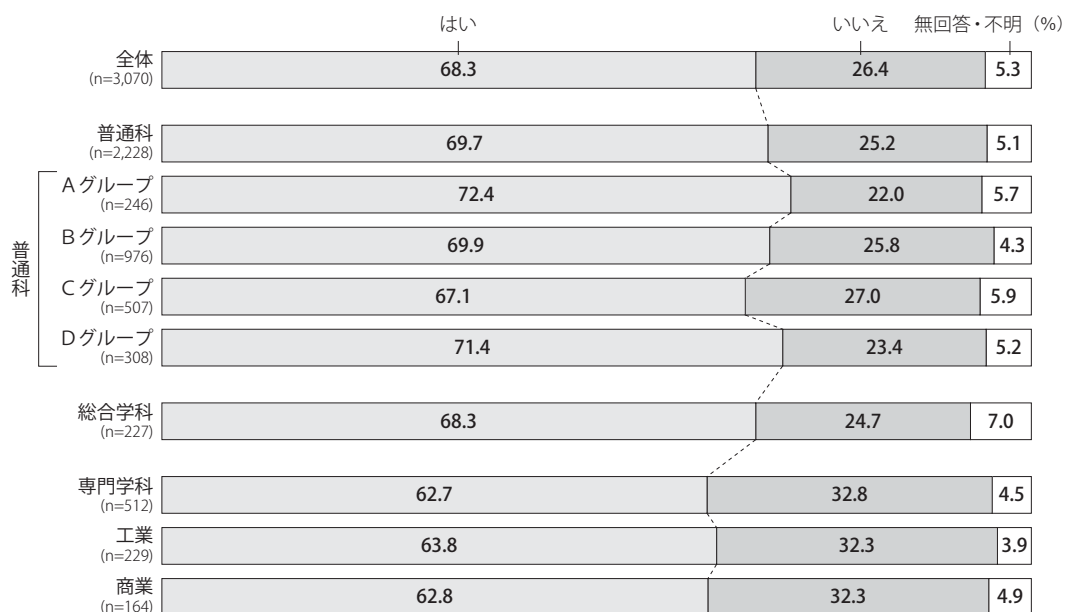
教員に、受け持ちの生徒に対して家庭での学習時間（宿題を除く）の指導をしているかをたずねたところ、「はい」と回答した比率は56.0%であった（図3-7-3）。学校種別に見てみると、普通科Bグループでもっとも高く、69.9%であった。一方、専門学科では33.2%（工業は29.3%）と低かった。家庭での学習時間（宿

題を除く）の指導をしている教員に対して、ふだん何時間くらい学習するように指導しているかをたずねた。平均時間を算出したところ、普通科Aグループでもっとも長く122.8分であった（表3-7-2）。一方、普通科Dグループで67.1分、専門学科で65.3分（工業では59.8分）と短くなっている。

## 第8節 学習意欲を高めるための工夫

受け持ちの生徒に対して、学習意欲を高めるための工夫をしている教員の比率は68.3%。学校種にかかわらず、6～7割の教員がそのような工夫をしている。

図3-8-1 受け持ちの生徒の学習意欲を高めるための工夫をしているか【教員調査】



教員に、受け持ちの生徒に対して学習意欲を向上させるための工夫をしているかどうかをたずねたところ、68.3%の教員がそのような工夫をしている（「はい」を選択）と回答した（図3-8-1）。学校種によってややばらつきがみられるものの、いずれの学校種においても、6～7割の教員がそのような工夫をしていることがわかる。工夫の内容について自由記述形式で回答してもらい、その結果を大きく分類したところ、「教材の工夫」（自作のプリントを用い

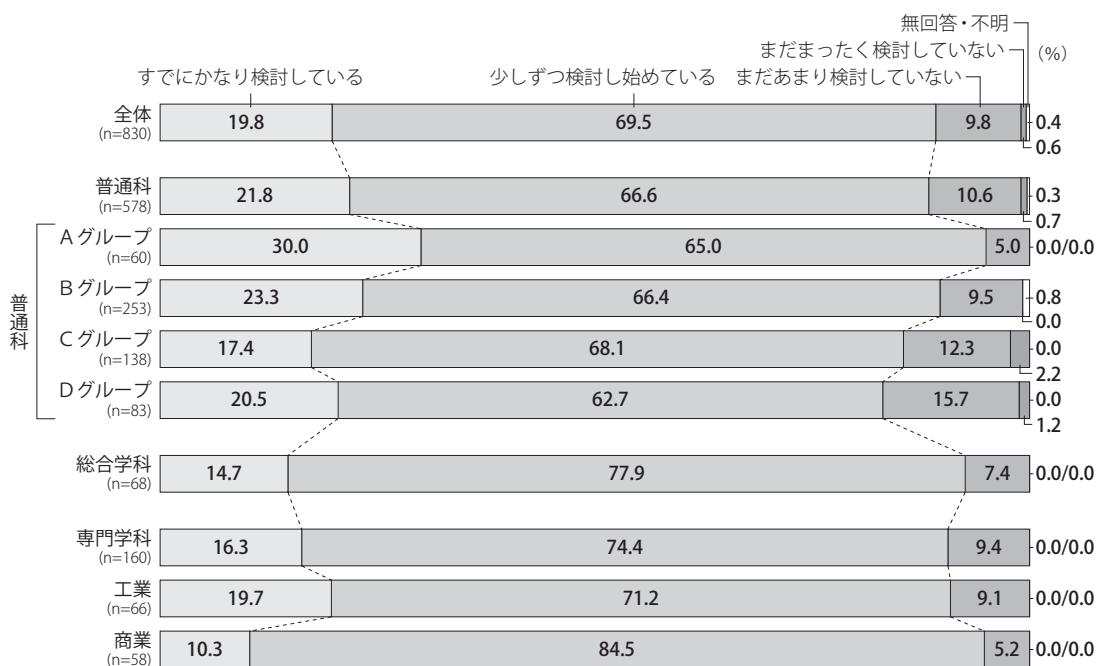
る、実物や映像・写真などを教材として用いるなど）、「学習形態の工夫」（グループ学習や体験学習、発表や議論を授業に取り入れるなど）、「指導技法の工夫」（生徒の興味・関心を引き出すような授業の展開や発問の仕方、題材の取り上げ方の工夫など）といった学習指導上の工夫が多くみられた。また、「学習内容の関連づけ」（学習内容と身近な話題や社会的な課題、将来〔大学や職業など〕とのつながりを意識させるなど）などの工夫も多くみられた。

## 第9節 学習指導要領等について

### 9-1 新学習指導要領に対する学校としての検討状況と不安感

新学習指導要領の検討状況は学校種別による差がみられた。「すでにかなり検討している」では、普通科 A グループは 3 割に対して、専門学科の商業は 1 割にとどまる。新学習指導要領の実施への不安について、校長は「人員の不足」をもっとも不安視している。また学校種別による差がみられた。とくに『『義務教育段階の学習内容の定着』への対応』への対応は、普通科 A グループの回答比率は 10.0% だが、普通科 D グループは 66.2% で、両者の間に 56.2 ポイント差がある。

図3-9-1 新学習指導要領の検討状況【校長調査】



高校では 2013 年より学年進行で新学習指導要領が実施される。2010 年 9 月の調査時点で、3 年後実施される新学習指導要領に対して、高校はどこまで検討しているのかをみてみよう。まず大きな特徴としては、どの種類の高校も、「少しずつ検討し始めている」の回答割合がもっと高い（6～8 割）ということである（図 3-9-1）。普通科の数値をみると、全体では 2 割の校長が「すでにかなり検討している」と回答している。もう少し詳しくみると、普通科 A

グループでは、3 割に対して、普通科 B・C・D グループは 2 割前後となる。一方、「まだあまり検討していない」「まだまったく検討していない」の数値は普通科 A グループから普通科 D グループにいくにしたがって、数値が高くなる傾向がみられた。総合学科と専門学科については、「すでにかなり検討している」は 1 割台で、「まだあまり検討していない」も 1 割弱である。高校での新学習指導要領に関する検討はもう少し進まないといけなだろう。

表3-9-1 新学習指導要領の実施にあたっての不安【校長調査】

	(%)									
	全体 (n=830)	普通科 (n=578)	Aグループ (n=60)	Bグループ (n=253)	Cグループ (n=138)	Dグループ (n=83)	総合学科 (n=68)	専門学科 (n=160)	工業 (n=66)	商業 (n=58)
教育課程の編成	43.6	43.6	33.3	44.3	45.7	43.4	51.5	40.6	34.8	48.2
授業時間の確保	37.2	37.0	46.6	34.8	39.9	36.1	45.6	34.4	34.8	34.5
先行実施される数学・理科への対応	44.8	46.0	36.7	46.3	50.0	43.3	55.8	35.6	33.3	36.2
共通必修科目（国語総合、数学Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅰ）への対応	24.9	22.3	16.7	20.6	23.9	30.1	26.5	33.7	31.8	36.2
各教科における「活用の重視」の実践方法	53.9	54.7	38.3	52.6	60.9	63.8	48.5	53.8	45.5	58.6
各教科における「言語活動の充実」の実践方法	58.2	57.4	40.0	56.6	61.6	71.1	61.8	60.0	57.6	56.9
「義務教育段階の学習内容の定着」への対応	44.8	38.6	10.0	28.5	54.4	66.2	64.7	58.2	54.6	55.2
大学入試科目の変化への対応	64.0	67.3	53.4	72.3	66.0	63.8	69.1	51.3	45.5	60.3
新学習指導要領に対する教員間の理解や意識の差	65.0	65.6	51.7	65.6	71.0	68.7	64.7	65.7	62.1	63.8
教員の多忙化の加速	79.5	78.9	75.0	79.9	79.7	78.3	85.3	81.9	83.3	79.3
人員の不足	81.6	81.3	68.4	81.9	80.4	90.4	86.8	82.5	84.9	77.5
施設・設備の不足	59.4	59.0	55.0	63.7	50.0	66.3	51.4	65.0	71.2	58.7
教材・教具の不足	51.9	50.0	35.0	52.5	47.8	60.2	48.5	61.3	72.7	55.2

注1) 「とても不安」+「やや不安」の%。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) □は全体よりも5ポイント以上、▬は10ポイント以上低いものを示す。

新学習指導要領の実施にあたって、どれくらい不安を感じるのかについて、校長にたずねてみた。表3-9-1は結果の全体値を示している。不安がもっとも高いのは「人員の不足」(81.6%：「とても不安」「やや不安」の合計、以下同)で、第1位に続き、「教員の多忙化の加速」(79.5%)、「新学習指導要領に対する教員間の理解や意識の差」(65.0%)は第2位、第3位となる。このトップ3の数値から、教員の意識や資源の状況に対して校長は高い不安をもっていることがわかる。

学校種別でみると、「教員の多忙化の加速」

はどの種類の学校でも不安の比率が高く、7割5分から8割5分となる(表3-9-1)。また、普通科Aグループの特徴はほかの普通科のグループや総合学科、専門学科と比べ、校長の不安が低く、唯一ほかより高いのは「授業時間の確保」(46.6%)である。普通科Dグループの特徴はほかに比べ、多くの項目で不安の比率が高く、とくに「『義務教育段階の学習内容の定着』への対応」は66.2%で、普通科Aグループ(10.0%)との間に56.2ポイント差がある。総合学科、専門学科も6割前後で、普通科Dグループと同様の傾向がみられた。

## II 学習指導に関する学校の取り組みと教員の実態・意識

### 9-2 新学習指導要領、中学校の学習指導要領、全国学力・学習状況調査に対する教員の意識

高校の新学習指導要領の変更点について、7割～8割弱の教員は「理解している」と回答した。教員が担当する教科に関して、中学校の現行学習指導要領について「知っている」の回答は3～4割程度である。さらに、中学校で実施している「全国学力・学習状況調査」の問題を「見たことがある」と回答した教員は2～3割で、学校種別による差はあまり大きくない。

図3-9-2 担当教科に関する新学習指導要領の変更点について【教員調査】

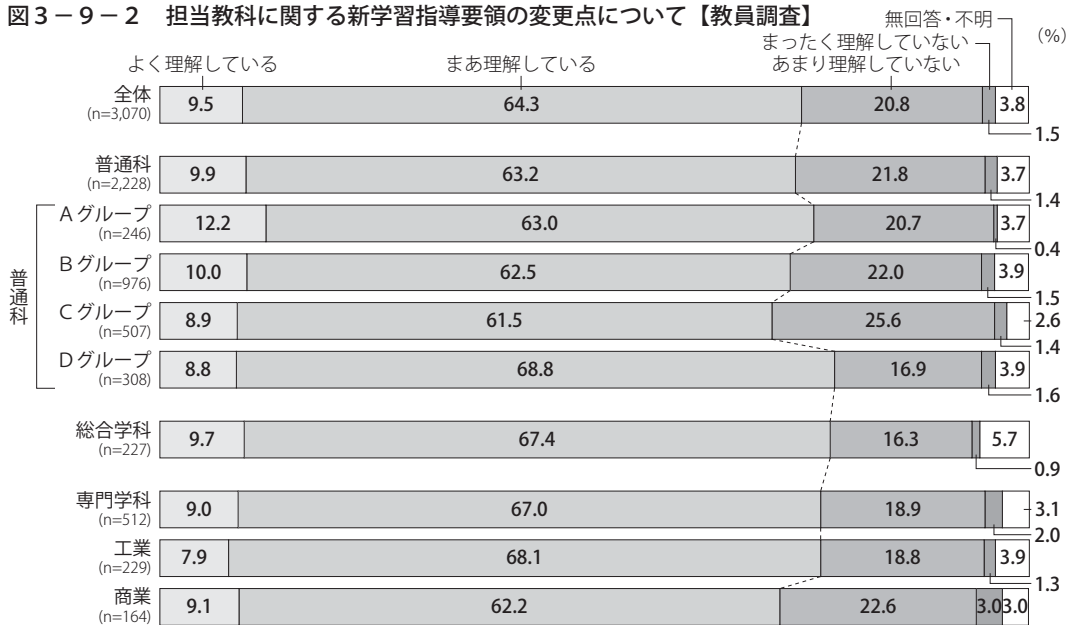


図3-9-3 担当教科に関する中学校の現行学習指導要領について【教員調査】

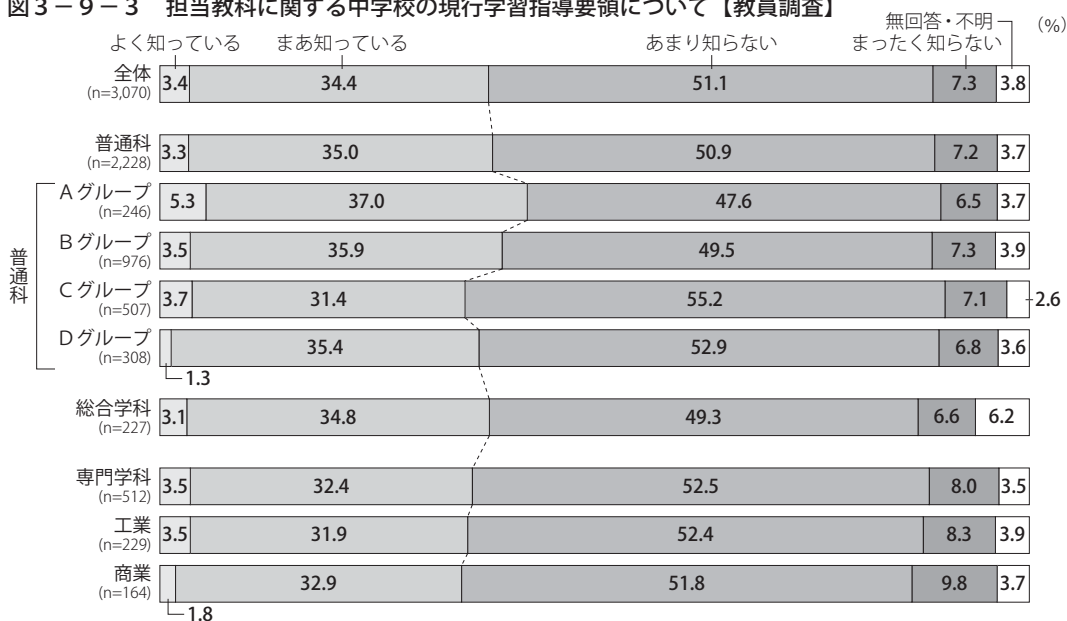
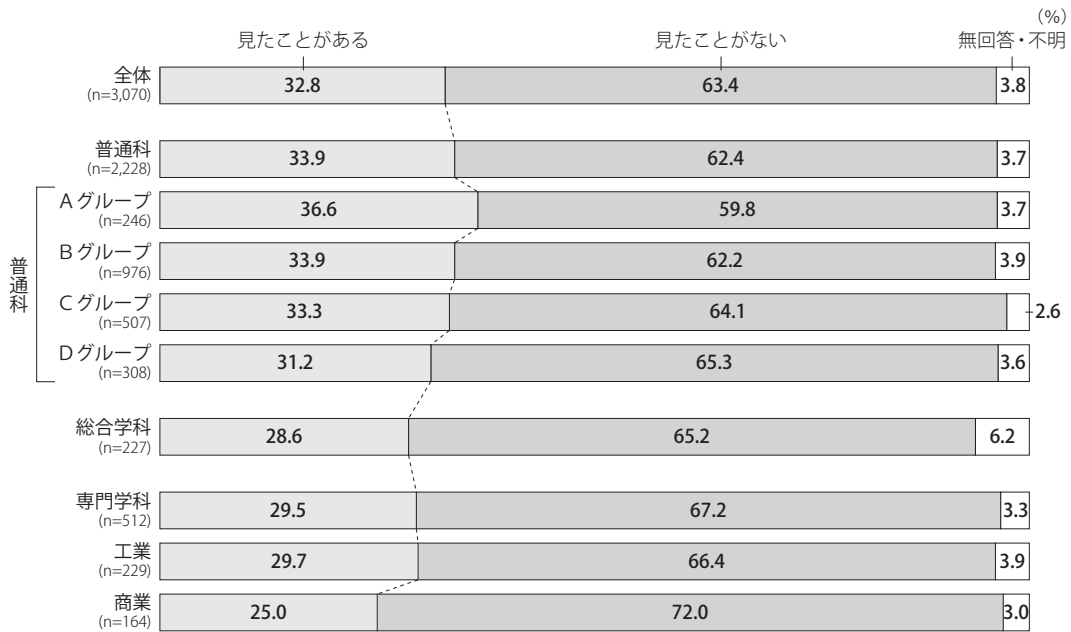


図3-9-4 中学校で実施している「全国学力・学習状況調査」の問題について【教員調査】



高校教員は2013年から学年を追って順次実施される高校の新学習指導要領の変更点について、どれくらい理解しているのだろうか。どの種類の学校でも「よく理解している」の回答が低く、1割前後である(図3-9-2)。「よく理解している」と「まあ理解している」の数値を合計すると、7割～8割弱となる。

「義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い」ことを悩みとしてあげている高校教員は8割、普通科C・Dグループだと、9割に達していることがわかる(1章2節表1-2-1)。それでは、高校教員は中学校の学習指導要領をどれくらい知っているのだろうか。本調査では、担当する教科に関して、中学校の現行学習指導要領の内容をどれくらい知っているのかをたずねてみた。図3-9-3からわかるように、どの種類の学校でも「よく知っている」と回答した高校教員がわずかに約2～5%で、「ま

あ知っている」と合わせると、3～4割である。一方、「知らない」「あまり知らない」「まったく知らない」の合計、以下同)の回答は5～6割に達している。全体的に高校教員はあまり中学校の学習指導要領を知らないことがわかる。

ここで、さらに高校教員は2007年度より中学校で実施している「全国学力・学習状況調査」の問題を見たことがあるかどうかを質問してみた。全体的には3割の高校教員は「見たことがある」と回答した(図3-9-4)。学校種別による差はそれほどない。高校教員は生徒が中学校でどのような学習をしてきたのかについて、ある程度知っているが、それほど詳しくない様子である。中高接続はこれからますます重視されるので、高校教員はもう少し中学校の学習内容や生徒の学習状況を知る必要があるかもしれない。